

世界各国と比較した日本の食料消費パターン

研究の目的

日本人の食料消費パターンの特徴を把握する目的で、世界各国との比較を解析した。用いた資料はFAOの Food Balance Sheetsである。

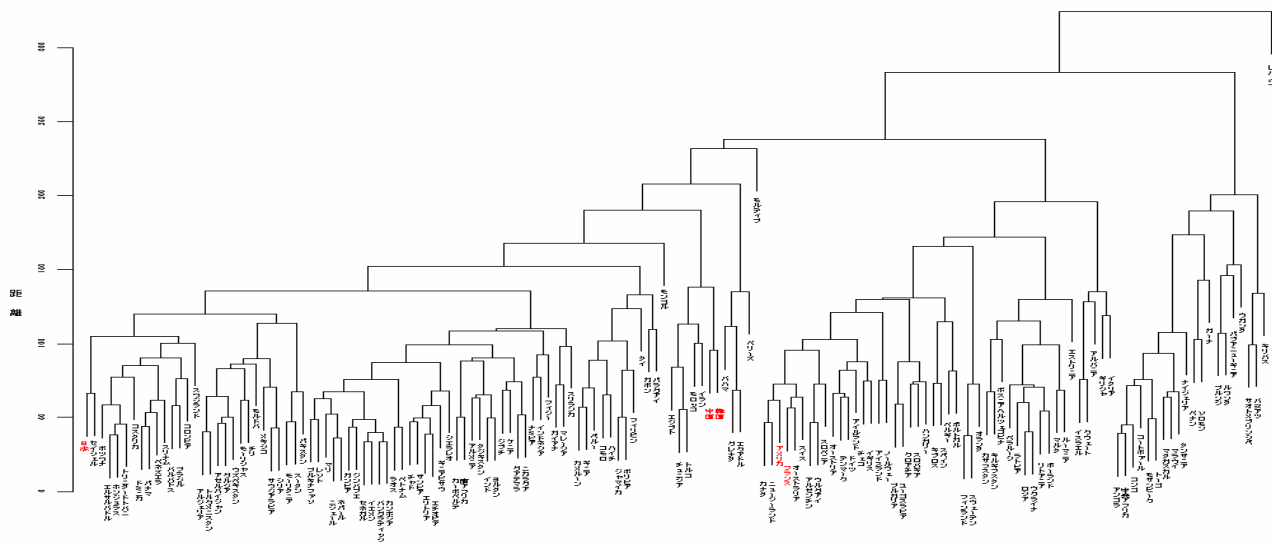
結果のポイント

世界の食料消費パターンは、A群(アジア中南米群)、B群(欧米群)、C群(原アフリカ群)の3つに大別された。

日本はA群のうち、中南米小群に入った。この小群の特徴は穀物・いも類の消費量が少ない。

日本の食料消費パターンにいちばん近いのはセイシェルである。

世界全体の食品構成は、この40年で、国民所得が2.0倍のものに改善された。



日本とのユークリッド距離

1 セイシェル	64
2 スリナム	81
3 チリ	84
4 モーリシャス	85
5 アルメニア	97
6 パルバドス	100
7 ヨルダン	102
8 フィリピン	105
9 グルジア	107
10 ベネズエラ	108
118 フランス	215
128 アメリカ	236

各年代における世界の食料消費パターンに対応する現在の国民所得

(ドル)		
第一主成分得点 重回帰式		
1961年	692	560
1970年	813	713
1980年	955	870
1990年	1096	1065
2000年	1349	1485
2000年/1961年	2.0倍	2.7倍



代表研究者: 柳本正勝
所 属: 応用微生物部

問い合わせ先: 研究交流科 関谷 修三
e-mail: atunisi@nfri.affrc.go.jp